

AFTERNOON TEA

北海道大学医学研究科・統合生理学講座・
認知行動学分野

田中 真樹

九州工業大学の花沢明俊先生のご紹介で寄稿させていただきます。私はおもに行動中のサルを用いて随意運動の制御、とくに眼球運動に関する研究をしています。関西の高校を卒業した後に北大に来てからは、UCSFへの3年間の留学を除いてずっと札幌で学び、就職し、家庭をもち、生活してきました。ここは冬の3ヶ月を除いては気候もよく、食べ物もおいしく、小都市でありながら車で40分も走れば国立公園級の自然があるという夢のようなところですが、ご想像の通り冬は違います。雪の降った後の晴れた朝などに思わず立ちすくむほどの景色に出会える機会はたまにあるものの、やはり雪はスキー場にだけ降ってほしいものです。この冬があるからこそ人口爆発が起きずに良い環境が保たれているのだと思います。12月になって4時半にもう真っ暗になる頃になると、日照時間の短い北欧などで季節性うつ病が多いというのがなんとなくわかるような気がします。こちらには「利雪・親雪・遊雪」という言葉があり、教室の同僚は週末などに存分にスキーを楽しんでいます。うちは子供達が小さいこともあって目下のところ冬の楽しみといえば近所でのそりすべりとワカサギ釣りくらいです。週末に家族でスキーを楽しめるようになる日が待ち遠しいばかりです。

さて、その同僚と昼食時などに研究者として研究所ではなく大学にいる「メリット」を話すことがよくあります。結局は学生をリクルートして互いに刺激しあうチャンスがあるということなのでしょうが、なかなか容易ではありません。自分自身の経験を振り返ってみると、生理学に足を踏み入れたそもそものきっかけは、大学3年生のときに基礎配属で加藤正道先生が主宰されていた生理学教室を選んだことでした。そこで当時助教授だ

った福島菊郎先生の実験を見せていただき、目の前にいる無麻酔のネコの脳の「音」を初めて耳にして感激したことをよく覚えています。当時は教室のメンバーも少なく、助教授といえども何から何まで自分ひとりで手を動かして研究を進めておられる様子を目の当たりにし、研究者というのはこういう職業なんだなあと感じ、それが今でも自分の基本姿勢になっています。

教室に出入りするようになってしばらくして、生理研で学部学生を対象にした実習があり、夏休みを利用して彦坂興秀先生の研究室を見学する機会に恵まれました。そこで訓練したサルの実験を初めて見て、ネコをなだめすかしながらの実験に較べてはるかに効率よくデータを収集でき、また、行動課題を工夫することでより高次の機能に迫ることができることに感銘をうけました。さらに心理学者が研究室に同居して研究を展開しており、いろいろな分野の成果をまさに統合しようとする意欲を感じて自分も将来はこうした研究をしたいと思うようになりました。また、生理研では当時客員部門の丹治順先生にも出会うことができ、研究のみならず北大のことも含めていろいろとお話を聞かせていただいて、こういう大先輩もいるのだと世界の広がる思いがしたことを覚えています。大学を卒業するときは人並みに進路の選択に迷いましたが、この生理研での印象が生理学を選ぶ強い要因となりました。

その後も大学院生活、留学生活の中で強い影響をうける出会いがありましたが、話がどんどんそれていってしまいそうなのでまたの機会を待ちたいと思います。先日、彦坂先生が札幌に来られた際、時折研究室を訪れている学部学生に生理研実習に参加するよう勧めたこととお話しすると、「ちょっと前まで君も勧誘される側だったのにな

あ」とからかわれました。受け入れ先の生理研の先生方は大変でしょうが、良いものは今後ともぜひ続けていただきたいものです。さて、来月から

今年度の基礎配属が始まります。たったの2週間ではありますが、されど2週間、生理学のおもしろさが少しでも伝わればよいのですが…

大阪大学・歯学部口腔生理

戸田 孝史

国立精神・神経センターの石橋英俊先生にご指名頂き今回執筆させていただきます。昨年4月に、現在の所属となりました。こちらの研究室は、姜英男教授のもと、スライス標本を用いた数々の研究プロジェクトが精力的に展開されています。とにかく明るく開放的な研究室で、スタッフは皆のびのびと研究をしています。

私はここに来る前は、東邦大学の岩村吉晃先生のもとで、サルの大脳体性感覚皮質の研究をしていました。手や上肢の再現領域が研究の中心でしたが、その後、共同研究者の先生のご理解とお力添えを頂きまして、その外側に位置する口腔再現領域の研究を始めて現在に至っています。これからは、スライス中心の研究室でサルの慢性実験をするという貴重な体験ができそうで楽しみです。

人に自慢するほどの趣味や特技はありませんが、強いて趣味をあげるとすれば読書です。モンテーニュ（1533-1592）の『随想録』（エッセイとも言います）は愛読書の一つで、関根秀雄訳で1946年刊の白水社仏蘭西古典文庫と1957年刊の白水社モンテーニュ全集、原二郎訳で1991年刊のワイド版岩波文庫の三つを揃えていて（写真）、その時の気分で、読みたい版の読みたい章を読みます（何という贅沢）。各章は、「我々の行為の定めなさについて」とか、「臆病は残忍の母」という具合にテーマがあり、それに沿って話が展開することもあれば脱線して元に戻らないこともあります。モンテーニュはギリシャ・ローマの古典に精通していた人で至るところに古典からの引用句が挿入されこの著作を重厚なものにしています。第二巻には「親指について」という短い章があり



『随想録』3セット

ます。母指が機能的に重要な指であることや、第一体性感覚野や運動野で母指に関連した領域が広いことは周知のことと思いますが、この章も母指の重要性を問題にしています。

…ギリシア人はそれを“アンチケイル”と呼んだが、いわば「もう一つの手」という意味である。それにラテン人（ローマ人）もまた、ときどき「親指」という語を「手」の意味に用いている。（関根秀雄訳）

このあと、この章は、ローマでは親指に怪我をしている者の兵役が免除されたこと、さらにその制度を悪用して兵役逃れを企て罰せられた者のことなどが続いてわずか1ページ足らずで終わってしまいます。他の章と比べて異質で短いこの章をもうけた著者の意図は私にはよくわかりませんが、身体の小さな一部分でありながら古典にたびたび登場する母指というものが、フランスの大思想家の興味をそそったことだけは間違いなさそうです。

長崎大学医学部保健学科でコメディカル分野での生理学を担当している船瀬と申します。大学院の同期で宮城教育大学運動生理学教室の前田順一先生からバトンを受けての寄稿となりました。まずは簡単な自己紹介から始めることにします。82年に筑波大学大学院体育研究科を修了後、東京都神経科学総合研究所の田中勳作先生（当時）の研究室に入りを許されることになり、「ヒトの随意運動制御と脊髄反射機構」に関するH反射実験の手ほどきを受けました。2年ほど勉強させていただいた後、縁あって岐阜大学医学部第1生理学講座（当時）に助手の職を得て、軟体動物の神経節細胞を用いた膜の電気生理に7年間程従事しました。学位を得た後、91年に長崎大学医療技術短期大学部（当時）に転出し、97～98年にオーストラリア・アデレード大学の生理学教室（Prof. T.S.Miles, Human Motor Control Unit）への留学を経て現在に至っております。この間、多くの先生方の薫陶を受け、どのような状況であっても何とかして某かの業績を出し続ける自立心（反骨心？）が培われたのではないかと思います。さて、この後は型通りに自分の研究内容に触れようかと思いましたが、これについては小生のホームページ（<http://www.am.nagasaki-u.ac.jp/gen/funase/fns.html>）をご覧くださいことにし、ここでは「Afternoon Tea」の趣旨である「自由きままに」という精神に則り、生理学や学会とは直接関係ないことは承知の上で、最近携わっている「大学評価」に関する雑感を述べてみたいと思います。

今や大学を含む多くの研究機関が独立法人となりました。国立大学法人では今後、第三者評価機関による法人評価として、年度評価と6年毎の中期目期間評価（国立大学法人が対象）、7年毎の認証評価（全ての大学が対象）が実施されます。

特に前者は、個人や研究室単位での外部資金獲得とは別に、大学運営交付金の査定にとって重要な評価になります。さらには任期制の資料となる学部独自の個人評価も必要になります。評価の結果は学部間にも予算上の格差を生み出すことになると思われます。そこで各大学では評価機関に提出する自己評価書の作成業務に迫られることとなります。評価項目としては「研究」「教育」「社会貢献・国際交流」「外部資金の獲得・財務」「施設設備の整備・安全管理」「組織・業務運営の改善」「評価の充実・情報公開等の推進」など多岐にわたり、且つ可能なものについては数値データでの裏付けが必要となります。話しをしているだけで何だか目眩がしそうです。国費で運営されている国立大学法人である以上、評価が不可欠であることはよくわかりますが、我々のすべき仕事は、やはり評価対象の内容を充実させることであるはずで、先に挙げた評価項目の幾つかは生理学会員の先生方にとっては、当然のこととして行ってきたことです。これらを充実させることは別にそれを評価するための書類作成の負担が新たに加わることになります。法人化による自由度の増大、競争原理の導入による活性化という目的の裏には、やはり懸念されていた通り膨大な事務的作業が隠れていたようです。評価のための作業があまりに過度になると、評価対象の核となる肝心の研究や教育は一体いつ行うのでしょうか？教育と研究は表裏一体とは言え、きめ細やかな教育には手間がかかりますし、研究という創造的活動にはそれなりの精神的・時間的な余裕も必要です。同時にこの様な主張は正論であるが故に、ある種の逃げ道に使われてきたことも否認しません。このような問題を乗り越え、日々奮闘努力している先生方にこそ本当の意味でのincentiveが与えられることを念願するばかりです。